

大災害時に総合型地域スポーツクラブが果たす 公共財としての役割に関する調査研究

—クライストチャーチ大震災後の地元スポーツクラブの取り組みから—

永松 昌樹*

船越 達也**

永浜 明子***

抄録

本研究は大災害発生時、被災地域に立地する地域スポーツクラブが地域住民に対して、公共財としてどのような災害復興機能を提供できるかを明らかにしていくものである。

2011年2月22日に発生したニュージーランド・クライストチャーチを中心に被害を与えた大震災は、発生から1年が経過した現在でも多くの人々の生活に影響を残している。田村ら(2001)は震災被災地における生活再建の7要素を挙げているが、その中で「自立と連帯を大事にする人」、「まちへの参加度が高い人」、「市民の積極的な公共的役割を大切にしている人」などに生活復興感が高いことを明らかにしている。

ニュージーランドは2011年に同国で開催されたラグビーワールドカップ(RWC)において優勝をしたラグビー強豪国であり、ラグビーを国技としている国である。そのため、国内には多数のラグビーフットボールクラブ(RFC)を発祥とした総合型地域スポーツクラブがあり、その存在は単にスポーツを行なう場というだけでなく、地域住民や家族が社会的な交流をするコミュニティになくってはならない組織である。ニュージーランドではスポーツクラブを通じて教育や地域での交流を促してスポーツ文化を育み、ボランティアイズムの必要性もその中で醸成する仕組みが作り上げられている。

各地に点在するRFCが災害発生時には地域住民に対して避難場所としてクラブ施設を開放したり、途絶えたライフラインが回復するまで水の供給をしたり、クラブメンバーが周辺建造物の修復や地域のクリーンアップを協力したりという支援を行なった。このような被災者に対する物理的、直接的な支援と同時にクラブマネージャーが重視したのは地域住民に対する心理的な支援、つまり可能な限り早く生活の日常性を取り戻させることである。震災復興の遅れが住民の雇用を奪い、多くの人々が他地域へ移動を余儀なくされることでさらに復興が遅延するという悪循環が続く中で、今まさに求められているのは地域住民に対する心理的サポートとそれを提供する立場としてのクラブの存在である。

キーワード：スポーツクラブ、ラグビー、公益機能、カンタベリー大震災

* 近畿大学経営学部経営学科 教養・基礎教育部門 〒577-8502 大阪府東大阪市小若江 3-4-1

** 大阪国際大学人間科学部スポーツ行動学科 〒570-8555 大阪府守口市藤田町 6-21-57

*** 大阪教育大学教育学部 〒543-0054 大阪市天王寺区南河堀町 4-88

Survey report of the public functions in sports club at the time of Canterbury earthquake 2011

—Testimony of club managers in Christchurch, New Zealand—

Masaki Nagamatsu*
Tatsuya Funakoshi** Akiko Nagahama***

Abstract

The purpose of this study is to clarify the public function of the sports club under reconstruction after big earthquake. Sports Club of New Zealand is advanced compared to that of Japan. Each sports club owns the facility and club house as the principal management of the club. The city is given to the sports club the right to use the park, has been entrusted to the sports club to park management. Local residents have been using the park through a variety of activities always. Therefore, the maintenance of the park has been fully decorated, and the safety of evacuation as a place has been secured. Earthquake of Canterbury has given a lot of damage to Christchurch residents. Immediately after the earthquake, sports club played the role of shelter. Members of sports clubs, helped to remove the rubble and distribution of drinking water. Its activity is still ongoing. In order to keep as safe and comfortable place in the park, sports club is essential to the region. To be repeated time of aftershocks after the earthquake, many residents have been evacuated to the park. The restroom and shower in the clubhouse adjacent to the park are provided. A large tent had been erected many as a place of refuge. Was also a sports club as a voluntary organization, the more people that compose it, to diversify the public interest function? There is a possibility that grow various functions of sports club. As an organization to keep the balance between work and leisure activities, sports clubs exist. Developed countries of the sports club showed the importance that when the earthquake disaster. In this study, the following results have been shown.

1. The sports club has the ability to manage the park for community.
2. The sports club owns the club house adjacent to the park.
3. Park managed by the sports club must be a place does not suffer from collapse.

Key Words : Sports club, Rugby-Football, Public function, Canterbury earthquake

* Kinki University 3-4-1 Kowakae Higashiosaka-shi Osaka 577-8502

** Osaka International University 6-21-57tohda-cho moriguchi-shi Osaka 570-8555

*** Osaka kyouiku University 4-88 Minamikawahori-cho Tennouji-ku Osaka 543-

1. はじめに

2011年は地震への備えが普段から必要とされてきたニュージーランド（NZ）と日本における震災の年となった。観光立国を宣言しスポーツツーリズムにも力を注ぐNZのスポーツクラブでは「野外レクリエーション活動におけるリスクマネジメント」を高等教育機関で学んだ人材が存在し、その能力が被災者支援に活用されていることが想像される。「スポーツとまちづくり」に際して、スポーツクラブが真の意味で公共財としての備えを考える機会は今回のこの時期を逃すことはできない。

未曾有の震災が襲ったNZとわが国には、火山国・島国・四季の存在・温厚で勤勉な国民性といった共通性があり、友好的な二国間関係は長く続いている。2011年はラグビーワールドカップ

（RWC）をNZが一国だけで開催する年でもあったが、事前に予定されていたクライストチャーチでの試合は会場の被災状況が著しく今回は試合会場として使用されないこととなった。大きな被害状況が徐々に明らかになっていく一方で、被災者を救済するために避難所として機能する場所が報道されている。わが国の場合、スポーツに関連する場所として体育館や学校などが提供されているが、NZ・クライストチャーチの場合は地元スポーツクラブがその機能を果たしていることが分かった。

本研究ではNZにおいて最も古くに設立されたスポーツクラブであるクライストチャーチ・フットボールクラブがクラブハウス等の施設を被災者に開放し、どのような活動がなされたのかを把握することを中心に、近隣のスポーツクラブへの聞き取りも含めて、調査研究を進め、まちの公共財として総合型地域スポーツクラブが、今後、どのような備えを有することが求められるのかを考えるための一助としたい。

2. 目的

本研究の目的は、公共財としてスポーツクラブが存在するために備えるべき機能について明らかにすることにある。

特に大きな災害時ならびにその後の復興期に大きな役割を果たしているのは、わが国の場合、公立学校である。それは避難時に人々が集まることのできる十分な広さと校舎等建物の安全性が確保されており、指定避難場所に定められているためである。

しかし、学校は子どもたちが学ぶための重要な拠点であり、避難所として長く使用されることが

望ましいとは考えられない。これまで学校や公民館などが担ってきた役割の一部でもスポーツクラブの施設と組織が賄うことができれば、スポーツクラブの公共性が高まり、それはスポーツの公益性を社会に広く認知されるきっかけともなるのではないだろうか。

3. 方法（仮説を含む）

NZ・クライストチャーチのスポーツクラブを訪問しインタビュー調査と資料収集を行う。この調査では、NZで最も人気のあるラグビーフットボールクラブ（RFC）を中心に発展したスポーツクラブを中心にクライストチャーチを拠点としているクラブを対象とした。

1) クライストチャーチ震災直後からの調査

クライストチャーチ・フットボールクラブ（CHFC）は国内最古の多世代型ラグビークラブであり、他のスポーツ種目の活動もできる総合型クラブである。

申請者は1996年の3月から半年間、このクラブを中心に「NZ南島の公園レクリエーション施設の住民活動に関する調査研究」に従事したが、その当時から交流を続けているクラブメンバーからの電子メールによって、クラブが被災者支援の活動を積極的に行っていることを知った。このメールを機会に、CHFCでの取り組み、さらにクライストチャーチの状況についての情報を取得した。

2) ラグビーワールドカップ開催時の調査

9月にはラグビーワールドカップ大会が開催され、オークランドとハミルトンへ訪問し、ニュージーランドに在住する邦人から震災後のクライストチャーチの情報を収集した。特に、クライストチャーチでの開催が回避されたラグビーワールドカップの影響についての情報を収集することができた。

3) クライストチャーチでの現地調査

NZ・クライストチャーチに2012年2月13日（月）～16日（木）の4日間滞在した。クライストチャーチを含めた周辺地域を統括するカンタベリーラグビーフットボールユニオンをはじめ、周辺地区のラグビーフットボールクラブの運営責任者やそれに準ずる地位にある運営者に対して訪問、聞き取り調査を行った。

その調査により2011年2月22日に発生した地震直後からのクラブによる支援活動の動きを把握し、また、近隣のスポーツクラブではどのような

取り組みがなされたのかということについて、周辺のスポーツクラブでの状況、公共スポーツ施設での被災者支援状況についても調査を広げた。ボランティアイズムと互助を背景に成り立っているスポーツスピリットを活用する方策について検討する。

4. 結果及び考察

事前調査となった1)と2)において被災時から半年間のクライストチャーチにおけるRFCがほぼ通常の活動ができない状況にあることが判明した。また、2011年2月の大きな地震以降、余震が続き、9月と12月は再び大きな揺れに見舞われたことも把握できた。

調査3)は、日本ラグビーフットボール協会の協力を得てNZ在住の邦人の仲介を経ながら、事前に調査対象の絞り込みと日程の調整を進めた。

各調査対象施設に対して、2011年2月22日の震災発生時の被災状況とその直後からのクラブの対内的、対外的な活動内容、さらに被災後から現状に与えている影響を中心に聞き取りを行った。

また、それら調査項目は、a)人的要素、b)物的要素、c)財政要素、d)その他、と4つの分類をした。

①Canterbury Rugby Football Union

(2012/2/13 16:00~17:00)

Amateur Rugby Manager

Tim Gilkison 氏

カンタベリーラグビーフットボールユニオン(CRFU)は大震災の影響を最も受けたクライストチャーチを含むカンタベリー州全体を統括するラグビー協会である。今回の調査では最初に州全体のラグビーに関する被災状況とともにユニオンに所属する各クラブの概要と被災の影響を把握することから開始した。

CRFU内のラグビープレイヤーは、大きく3つに分類される。NZ、オーストラリア、南アフリカ共和国の南半球3ヶ国の計15のクラブチームにて行われるラグビーユニオンの国際リーグ戦である「スーパーラグビー」に所属して、クライストチャーチを本拠地とするトップクラブチームである「クルセイダース」をはじめとして、カンタベリー州代表チーム、協会登録をしている各クラブチームに分類される。

CRFUによると今回の震災によって減少したプレイヤーは、トータルして約7%になり、またコーチやレフェリーの減少は約14%にのぼる。プレイ

ヤーの減少は、そのほとんどが震災に対する不安や仕事を失ったことにより、クライストチャーチを離れたことによるものである。居住していた家屋の損壊や家族の失業により、一時的に活動を停止するメンバーも多く存在していた。

州内のラグビークラブにおけるクラブ所有の施設や設備に関する被害については、クラブハウスなどの建築物に大きな被害は見られないが、グラウンドの損害が多く見られた。特に震源地に近い海側の地域に被害が大きく、内陸側の施設には被害が少なかったため、人口が内陸側に移動する現象がみられた結果、被害の少ない内陸側の地域でのクラブ間互助により復興が促進された。

CRFUの震災関連による経済的な損失としては、2011年9月~10月の期間、NZ全土で開催されたラグビーワールドカップ(RWC)の開催会場とされていたクライストチャーチのAMIスタジアム(ランカスターパーク)が震災による被害を受けたため使用不能となったことにより、予定されていた試合がすべて他会場に変更された影響があげられる。出場国の事前キャンプの受け入れも出来ず、CRFUの試算したRWC関連の損失は約1500万NZドルとされている。また、同スタジアムはクルセイダースの本拠地でもあり、国内で最も観客動員を見込めるウェリントン・ハリケーンズとのスーパーリーグの試合がホームゲームの予定であったが他会場に変更されたため、この事業損失も約800万NZドルと試算している。



写真1, 2 取り壊しの進むAMIスタジアム



写真3、4 建設中のクライストチャーチスタジアム

これらの影響でクライストチャーチの観光収入への影響は大きいですが、CRFUには国際ラグビー評議会（International Rugby Board : IRB）からの経済的支援が受けられたこと、またラグビー関係で以前より交流のあった日本の東芝などの企業から支援を得られたことなどにより、基金団体を作って100万NZドルの確保ができた。この資金を元にグラウンドの修復を中心に進めており、現在グラウンド修復以外の資金の配分を検討中である。

Gilkison氏は「震災復興においてラグビーの関わる力は大きい」と明言しており、特に「CRFUとしては、被災住民に対してラグビー（をする環境やゲーム機会）を提供することが復興への使命」と述べている。



写真5 CRFUにてTim Gilkison氏と筆者ら永松(左)、舩越(右)

②Christchurch Boy's High School
 (2012/2/14 10:00~11:00)
 Rugby club Director
 Stephen Dods氏
 Community Relations Manager
 Lisa Marr氏

クライストチャーチボーイズハイスクール（CBHS）は、市街地に位置する約130年の歴史を持つ名門公立校である。本調査を行うに当たり、被災地の学校における影響を把握するために調査訪問した。

CBHSでは、およそ10%（1500名中120名）の生徒が家庭の問題（家の都合、父親の失業）で学校を一時離れなければならなかった。また、教職員80名のうち15名が家を失い、2~3週間仮設テントで避難の後、今でもホテル、モーテル暮らしを強いられている。（但し、その場合1年間政府からの援助を得られる。）

震災による生徒たちへの影響としては、周辺道路や建築物への被災により、通学に長時間を要するためにスポーツ活動が出来なかったり、地域のショッピングセンターが閉鎖されたため風紀の良くない他の地域まで行かねばならず、悪い影響に感化されたりする傾向がみられている。カウンセラーが常駐しており生徒のメンタル面をサポートしているが、最近生徒のテンションが高まってきており、教職員達は危惧している。

その他、家族の失業により、授業料を払えないという問題がクラブに対してだけでなく、学校の問題として取り上げられている。家族の失業に関しては、市街地において主にサービス業が震災以降クローズしているため女性の雇用に大きく影響している。

校舎の一部が使用不能となっており、未だ修復のめどは立っていない。また、グラウンドは液状化現象で被害を受けた。保護者、コミュニティー、OBの援助で修復をしたが、降雨の後には地面がデコボコのまま固まってクリケットはできない。震災後、多く周辺住民が一時家族で避難したが、学校施設は使用されなかった。

経済的な影響としては、政府の復興方針が不安定なため市民の同意を得られておらず、先行きが不透明な状態である。特に今年度は、海外からの留学生の受け入れが出来なかったため、授業料収入には若干の影響が出ている。

③New Brighton RFC
 (2012/2/14 16:00~17:00)

Rugby Development Officer
Roddy Butt 氏

ニューブライトン RFC はカンタベリー地域において常に上位に位置する強豪であり、その所属メンバーは遠くから通っているケースが多く、大人に関してはメンバー増減にほぼ影響なかった。しかし、周辺地域に居住していたジュニアメンバーは多くが移動していなくなった。同地域の他チーム（サムナー、リトルトン、ジェリー）は地元在住のメンバー多いため、影響が大きい。

震災後、クラブとして取り組んだ活動としては、地域住民に対してグラウンドを開放し、地域ハイスクールでコーチングを行った。震災によって子供に与えた精神的なインパクトが強く、プレー中にレフェリーに対するクレームが増えるなど、親の悪影響を受けている傾向があったので、子ども達には注意を促した。

比較的震源に近く、周辺の家屋や建物に対する被害は大きかったが、クラブの建物、グラウンドへの影響はほぼなかった。

日本を含めて海外からの支援はユニオンにはあったが、クラブにはなかった。ユニオンも財政的には厳しい状態なのでやむを得なかった。クラブ内のバーの収益も激減しており、運営資金面に影響が出ているため、もし支援を望むならば、経済的な支援を最も必要としている。

④Christchurch FC

(2012/2/15 9:30~10:30)

Rugby Development Manager
Mike O'Donovan 氏

クライストチャーチ FC は 1863 年設立の NZ で最も歴史を有する強豪クラブであり、市街地近郊に位置している。今回の震災では、家族の失業などの被害、子どもへのダメージなどもあまり見られず、メンバーへの影響とともに施設、グラウンドへの大きな被害も少なかった。そのため、一時的な閉鎖後の再開によってメンバーはすぐに復帰してクラブ人数に変化はなかった。周辺クラブで被災した人は、もっと遠くの他地域へ移動したため、他クラブからの流入も見られなかった。被災したことによって、震災前は 13 チームがそれぞれバラバラに活動していたが、震災後お互いに団結して結束が高まった。

被害が少なくメンバー数にも大きな変化がなかったため、海外のクラブから応援メッセージなどがあったが、具体的な支援は受けなかった。多く

のメンバーをオールブラックスやクルセイダース、州代表チームに送り込んでいるが、それらのチームがゲームを行い勝つことが住民に勇気を与えると考えているので、それをクラブとして支えるのが現在の使命だと捉えている。



写真6 Christchurch FC が所有するモーテル

⑤Linwood RFC

(2012/2/15 13:00~14:00)

Rugby Manager
Scott Hansen 氏

リンウッド RFC は震源地と市街地の中間点に位置し、周辺地域とともにクラブに対して大きな人的要素、施設的な要素において被害を受けたクラブのひとつである。

周辺地域で家屋などに被害を受けた住民が多く他地域に移動をしたため、もともと 450 名の在籍メンバーが震災後 180 名まで激減した。特に子供や若いメンバーの心理的影響が大きく、「眠れない」、「家に帰れない」という声を頻繁に聞いた。震災直後には、クラブメンバーが周辺家屋の修復を支援したり、クラブハウスを開放したりして地域住民に対して水の配給を行った。

グラウンドはひび割れが発生して、液状化現象により大きな被害を受けた。それらの修復については自分たちで出来ることはしたが、専門業者にも依頼を要した。また、建物へのクラック、壁のゆがみなど施設的な被害は大きかった。その影響でバー、ホテル、レストランが営業できず収入が激減した上にクラブハウスなどの修復費用は市の管理となるため、修理の可否は市の判断次第となっている。ただ、クラブの存続を左右するくらい多額の修復費用が見積もられているため、先行きは不透明な状態であり、経済的、人的な支援が最も必要である。

クラブ出身者のクルセイダースでの活躍が住民

にとっては日常的なことであり、この日常的なことを出来るだけ早く回復することを目指している。また、NZにおいても住民同士が「隣人を知らない」「家族の知り合いを知らない」といった問題が起きている。今回の被災を契機に地域のコミュニティーづくりの必要性が高まってきている。それらを達成するためにクラブマネージャーとして、①施設の改善、②復興に対して前向きな姿勢での取り組み、③メンバーに対して楽しむことを浸透させていく、といったことを継続して促進していきたい。

⑥University of Canterbury
(2012/2/15 16:30~17:30)
School of Sciences and Physical Education
Hugh Galvan 氏

Hugh Galvan 氏はカンタベリー大学の RFC のコーチであるとともに CRFU のコーチを兼任しているため、大学のラグビークラブや学内施設の被災状況に加えて CRFU に対する影響についてインタビューを行なった。

カンタベリー大学 RFC では大きな人的被害はなかったが、トップレベルの 2 名がここではプレーできないという理由でオタゴに移動した。一般の学生はそのようなことはないと思うが、復興に向けた作業や勉強をしたり、その合間にトレーニングをしたりしなければならないので多くの時間が失われている。そのため、肉体的な疲労の蓄積が見られるので、メンタル面でのリフレッシュが必要だと思われる。

大学内の施設的な被害状況としては、講堂、レクチャールーム、ラグビークラブハウス、チャーチなどは被害を免れたが、現在でもいくつかの校舎が使用不能のままになっている。そのため、ラグビーグラウンドに仮設オフィスや教室を設置しなければならない状況となっている。

地域のクラブや住居が被災したのを受けて学生たちが自主的に施設の修復や復興のためボランティア活動を行った“Student Army”が活躍している。このような活動を通して、クラブメンバーの一致団結が見られた。

CRFU に対する影響については、RWC におけるゲーム、事前キャンプが見送られたことによる経済的な損失の大きさを挙げている。また、クライストチャーチを中心とする周辺地域のホテルやモーテルが復興作業の人員によって占められており、ツーリストがやってこないの、観光による経済復活も当分の間は期待できない。

多くのクラブが運営維持費以上に今回の修復費用が掛かるという見積もりを抱えており、非常に厳しい状況がしばらく続くという見通しを示している。

クルセイダースの試合では観客動員できるが、収容力のあるスタジアムに限られるので、一極集中している。新スタジアムの完成に期待したいが、取り壊しの進んでいる AMI スタジアムほどの収容能力がないので、これも収益減になっていく可能性がある。

⑦Sumner RFC
(2012/2/16 8:30~9:30)
Past President
Graham Rule 氏

サムナー RFC は震源地に近い地域で活動しており、被害の大きかったクラブである。

震災後、家族で一時避難をしたメンバーが多かったため、クラブメンバーが約 30%減少した。しかしながら、夏になってから少しずつ戻りつつある傾向にある。特に女性の方がメンタル面でダメージを受けてトラウマになっている。

クラブハウスなどの建物の被害は少なかったが、3つのグラウンドのうち、2つが被害を受けて現在に至っても使用不能な状態となっている。このグラウンドの被害と修復については保険会社が補償をしており、現在交渉中である。今回の調査の中では唯一保険会社による補償の可能性を持つケースであった。

RWC からの収益が得られなかったため、ユニオンからの経済的な援助はとても少なかった。しかし、海外から来た選手の所属会社（日本：トヨタ）から寄付金という形で支援を得ることが出来たので、修復のための費用の一部に充てた。

震災時にはクラブの損害が大きく、地域のサポートはほとんどできなかった。今後のクラブ復興には①メンバーが戻ること、②グラウンドの修復が重要課題としてあげられ、全ての要素を含めて経済的な力（お金）を必要としている。

⑧Lyttelton RFC
(2012/2/16 13:00~14:00)
President
Clinton Norris 氏

リトルトン RFC は今回の調査クラブの中で最も震源地に近く、周辺地域における住居や建築物の被災状況においてダメージを受けており、未だ修

復が進んでいないクラブである。

震災後、クラブメンバーはジュニアメンバーが約30%、大人の約50%が減少した。震災直後は周辺企業からクラブに対して支援を得たが、その後クラブメンバーが周辺地域のクリーンアップを手伝った。



写真7 被災後、復興が進まない Lyttelton の町

周辺地域の施設的な被害は大きかったが、グラウンドのダメージはほとんどなかった。また、クラブハウスに関しては、老朽化が進んでいたもので5年前に売却しており、現在は近隣レストランを一時的に間借りしていた。そのため施設的な損害もなかった。

旧クラブハウスはグラウンドから離れた場所に位置していたため、新しいクラブハウスはグラウンド近くで150名程度を収容できて、子どもが遊べるような設備を持ったものを再建したいと考えている。現在、役所の承認を待っているが、周辺地域の被災状況を考慮すると4~5年は必要かも知れないという見解を持っている。

おそらくメンバー減少が最も著しく、損害状況が大きいからという理由で、カンタベリーユニオンの震災復興基金から突然「支援する」と連絡があり、金銭的援助を得られた。

クラブの復興のために、最も必要な要素は新しいプレイヤーの確保をすることであり、ゲームに勝ち続けることでチームにメンバーが戻ってくると思っている。

⑨Parklands RFC

(2012/2/16 15:30~16:30)

President

Maulice Lawlor 氏

パークランド RFC は、今回の調査対象クラブの中で唯一、子供に特化した方がランニングコスト

の効率がよいという理由でジュニア(6~13歳)のみを対象としたクラブで約180名のメンバーを有している。この地域には、5人のオールブラックスプレイヤーが現在居住しており、また個人事業主も多く、生活水準が比較的高い地域である。

2010年9月と2011年2月の2回の震災以降も、6月、12月と地震があったので、その影響で現在もラグビーをできない状態である。そのため、現在は毎月第2土曜日に保護者を含めた懇親会を継続的に行っており、毎回約200~250名の参加者がある。

地震発生時に学校のプールがあふれたり、住居や周辺道路が壊れたりしたのを見た子供たちは今もおびえており、親の心配が子供に伝わっている。RWC開催前や期間中はお祭り気分で盛り上がっていたが、終了後の12月の地震でまた元のネガティブなムードに戻ってしまった。学校施設も被災しており、授業を2回(8:30~13:30、13:30~18:30)に分けて行わなければならないので、クラブとして活動する時間が得られない現状である。

もともとクラブハウスは所有せず、地域コミュニティセンターを使用していたが、震災後は学校のホールを借用している。震災後特に学校管理者としっかりコミュニケーションがとれており、連携はうまくいっている。そのため施設の借用もうまくいっている。

グラウンドは市から借りているが、震災の影響で液状化し、使用不能となった。今は修復して使用可能となった。



写真8 震災直後、液状化によって使用不能になった Parklands RFC のグラウンド
(Maulice Lawlor 氏 提供)

地域の住居や建物などにはダメージがないように見えるが、地盤とともに家屋の土台に損傷が見られているケースが多いので、これからまた地震が継続すると危ない。被災直後、ライフラインの

回復に時間がかかり、特に水の確保が困難だった。

CRFU から 2000 ドルの援助があった。ただ、メンバーの減少で年会費も大幅に減少をし、その回復には約 4~5 年は必要とみている。

5. まとめ

2011 年 2 月 22 日、NZ・クライストチャーチを中心に発生した大震災は、多くの家屋や建造物の倒壊、液状化被害の影響に代表される交通機能の破壊を伴って、数多くの尊い人命を奪う災害となった。その影響は現在もなお、多くの人々の生活に及び、震災からの復興を困難なものにさせている。しかし、NZ には我が国よりも地域住民に根付いた各種スポーツクラブが存在しており、特に NZ の国技ともいべきラグビークラブが数多く点在している。NZ 人にとってラグビーはまさに文化であり、多くの国民の生活に組み込まれている。

今回の研究を通して、震災とスポーツクラブの関係をまとめることができる。

a) 人的要素

- ・カンタベリー協会としてラグビーを提供し続けることが復興への使命。クライストチャーチの復興にラグビーという国民的なスポーツが関わる力は大きい。(CRFU)

- ・クライストチャーチ市内のショッピングモールが一つしか残っておらず、生徒がそこに遊びに行くが風紀が悪く、非行に通ずる悪い影響に感化される恐れある。カウンセラーがメンタル面をサポートしているが、最近、落ち着きがなくなっている様子がみられ危惧している。(Christchurch Boy's High School)

- ・子供たちの精神的なインパクトが強い。(New Brighton RFC)

- ・震災後、お互いに団結して結束が高まったように思われる。クルセイダースがリーグ戦に出場しゲームを行い、勝つことが住民に勇気を与える。それをクラブとして、また、指導者として支えたいと思う。(Christchurch FC)

- ・平素からクラブ出身者がクルセイダースで活躍することが日常なことであったので、この日常的事が継続されることこそ人々に安心を与える。NZ においても日本と同様に「隣人を知らない」「家族の知り合いを知らない」といった問題が起きている。コミュニティーづくりが必要。(Linwood RFC)

- ・カンタベリー大学の学生たちが自主的なボランティア活動“Student Army”として活躍し、クラ

ブメンバーの一致団結が見られた。しかし肉体的な疲労の蓄積が見られるので、精神的なリフレッシュが必要。(University of Canterbury)

- ・女性の方がメンタルなダメージを受けており、時々大きな余震がさらに不安感を与えており、トラウマになっている。(Sumner RFC)

- ・最も必要な要素はクラブのメンバー、特に試合で活躍できるプレイヤーの確保である。勝ち続けることでチームにメンバーが戻る。(Lyttelton RFC)

- ・震災以降もラグビーをできないので、毎月第 2 土曜日に保護者を含めて懇親会を行っている。(Parklands RFC)

b) 物的要素

- ・海側の施設に被害が大きく、被害の少ない内陸側地域で復興を促進している。(CRFU)

- ・グラウンドの被害は保護者、コミュニティー、OB の援助で修復。(Christchurch Boy's High School)

- ・震源に近く、周辺家屋などの被害が大きかった。(New Brighton RFC)

- ・グラウンドはひび割れ、液状化現象で被害。建物へのクラック、壁のゆがみなど被害大。(Linwood RFC)

- ・いくつかのビルが使用不能、ラグビーグラウンドに仮設オフィス、教室を設置。(University of Canterbury)

- ・グラウンドの被害があるが保険会社が補償。(Sumner RFC)

- ・震源地に最も近かったがグラウンドのダメージはほとんどなし。クラブハウスは売却した後だったので、施設的な損害もなし。(Lyttelton RFC)

- ・グラウンドは市から借りているが、震災の影響で液状化、使用不能となった。(Parklands RFC)

c) 財政要素

- ・IRB からの支援、基金団体を作ってグラウンドの修復 (100 万ドル)。グラウンド以外にも資金の配分を検討している。(CRFU)

- ・メンバーの脱会によるクラブの収益が激減。財政的な支援が最も必要である。(New Brighton RFC)

- ・修復費用は市の管理となるため、修理の可否は市の判断次第。ただ、クラブの存続を左右するくらいの金額が見積もられている。(Linwood RFC)

- ・維持費以上に今回の修復費用が掛かるかもしれないという見積もり。(University of Canterbury)

- ・海外からの選手が寄付金。復興には①メンバーが戻ること、②グラウンドの修復、すべてを含めて経済的な力(お金)が必要。(Sumner RFC)

・メンバー減少が最も著しく損害が大きいため、CRFU から金銭的援助を得られた。(Lyttelton RFC)

・CRFU から 2000 ドルの援助があった。しかし、回復するには4~5年は必要。(Parklands RFC)

本研究は、大災害の発生時に被災地域に立地する地域スポーツクラブが災害復興を目指す地域住民に対して、どのような機能を提供できるかを検証していくことである。

今回の調査で得られた災害時における地域スポーツクラブの果たした機能的な効果としては、実際に被災した住民の避難場所であったり、寸断されたライフライン中でも特に水の供給を賄ったりという被災者支援の様子が伺えたが、それ以上に機能したのはクラブに所属するメンバーのみならず周辺住民に対する精神的な支えとしての存在価値である。つまり、震災による被害を受けた各地域の住民は住み慣れた住居を放棄したり、職業を失ったり、通い入れた学校を移らざるを得ない状況に追い込まれて、日常的な生活を奪われたことによる心理的なダメージを多くの人々が受けている。この傾向は女性や思春期を迎えている若年層に対して特に多く見られ、様々な心理的なストレスを抱えている。

NZ の人々はその奔放な振る舞いと雄大な国土に育まれてきた背景から、災害という局面に立たされても我々のインタビューに対してポジティブな発言内容が多く見られたが、それはネガティブな発言をすることによって精神的な悪循環を招かないための自己防衛的な行動であるということに気づかされた。災害に対する内面的なダメージを緩和するためには、被災者各々に心理的な支えを持つことが必要である。その心理的な支えとは家族であり、地域のコミュニティーであり、積極的な他者との関わりを促進する「場」が必要である。

数名の RFC マネージャーが復興に向けての課題として挙げた「ラグビーを提供し続けること」「代表チームにメンバーを送り込むこと」「ゲームに勝つこと」というのは、いわば失われた地域住民の「日常性」を一時的であっても取り戻す瞬間であり、それがクラブの使命であると述べている。NZ にはこの地域スポーツクラブの存在により、家族を含めた地域コミュニティーが確立されており、そこを中心としたクラブと地域住民との間の相互作用が災害時の復興支援に大きな影響をもたらしていることが今回の調査で得られた。

今回の調査では、スポーツクラブ自体の被害の把握や、クラブ運営への影響も聞き取りながら、

スポーツクラブがどのように地域社会に対する手助けを行なうことができるのかを探った。多くのクラブマネージャーが語ったように、「クラブメンバーが戻り、多くの人々がクラブに集まることによって、その対応は拡大することができる」という“集いの場”としての重要性を再認識させられた。常に地域住民の集いの場所となっているというスポーツクラブの自負の背景には、普段からスポーツクラブの活動に利用している公園の管理責任組織としての役割を果たそうとする意気込みと、甚大な被害であるからこそネガティブな言動をとらないようにする心遣いを垣間みだ。

災害復興が現在も遅々として進んでいない被災地各所の現状において、災害の影響を受けた各クラブではその再生に長い年月を要するとの見解を示している。地域スポーツクラブの機能を多面的に把握するためには今後も継続して復興状況や各クラブの復興支援状況を追跡することが求められる。

参考文献

「阪神・淡路大震災からの生活再建 7 要素モデルの検証: 2001 年京大防災研復興調査報告」

田村 圭子, 林 春男, 立木 茂雄, 木村 玲欧
地域安全学会論文集 (3), 33-40, 2001-11

「NZ 地震 1 年 復興への道」

読売新聞特集・朝刊 2012 年 2 月 20 日~22 日

「大震災後の社会学」

遠藤薫編 講談社現代新書, 2011, 12

「学校施設の防災機能の向上のためにー避難所となる学校施設の防災機能に関する調査研究報告書ー」

国立教育政策研究所 文教施設研究センター

「避難所となる学校施設の防災機能に関する調査研究」研究会 2007.8

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。